

貝原町人囊



門 〇仁 〇
號 1715
卷 1-4

貝原先生口授

附錄底拂添

明治四十年四月廿四日
藤野 濟 氏 贈

町人囊

補刻考訂
合卷四冊

浪速書房 田中宗栄堂

町人囊序

聞こころは家持とやらにせしむるは、
底より留りし紙をむに捨てる人も、
おはしむるあつちのやうに、
ふも何と家童子にあつて、
さほふもぐれ土器の、
学問いを食うて、
世俗乃糟粕と何れと、

町人囊卷一序

く撰ひし人とは素より愚かき
かれ身あれば撰ひ用ひざるもあか
袋乃ち虚しく醜く成り集りては其
も撰ひし事とあるいど何の用より立
さく我をかくかくて分別囊より人
ぬきやうに虚しく成り其の多し
獨けざるもいとわづらひたるを
おとしし人えさるの秋れたるは

長崎 西川求林翁書

町人囊卷一

藤野源氏遺愛記

或人の云町人よせめて其の
町人れ品位とせし人町人の町人
知てのら其の正し其身をわさ
いふといふは聖人乃書紙考る
五川の正後なり是を五等の人倫
第一は天子第二は諸侯第三は
四は士第五は庶人なり是と
天子の禁中様諸侯の諸大名
おまの鎮守官位の諸物頭士
の諸旗本云

官の形也公方様の禁中様は次で諸候の
主たる級小公方家の侍の至官よりといふこと
生れたる六候は準じ給ふ例なり公方家の
侍乃外に諸家中よりふる陪臣といふ事又
旧の侍いづれも庶人けりたりと云ふ其内
一國の家老より人の諸候の大夫とあれば公方家
の侍は準じ給ふ其外國より諸侍扶持切米
の面いづれもみる庶人なりぬ庶人は四つれ
品あり是と云ふと号より士農工商これなり
士にあつては諸國又内の諸侍なり農は耕作

人なり今に是を百姓と号し工は諸職より
商は高貴人なり上の五等此四民は天理自然の
人倫と号し此四民多しと云ふ五等の人倫は
まゝなり此級より世尊萬國より小此四民ありと
いふ事なり此四民の外は人倫をば遊民といひて
國土のちりぬ用多し人間なりと云ふ此四民
のち工と商と云ふて町人といふ事なりいふに
百姓より町人の下座なりといふ事いふは比より
天下金銀はくしとありて天下の金銀財寶
みる町人の方より主たる事なり貴人乃御前

あつちをいふて

哉學者のいつかいつか「四海の民おのゝ其業を」といふ
はめて相とる事なりし近代の百姓職人
いづれに高賣となさり武士は地と高賣め
似る類のくかもし又かふてま高なるに
金銀をのつて物を賣り利倍とをそとて
まぬのつては高の字れん高量といひて
物の多少好悪をけりけりて用ひる利倍を
得るはみな是高の類なりといふに金銀をつま
まきて唯のいふて物は易なりとて

易といふ都て物の多少を量とて考
へる其利をさるる者おの物にけりて
乃物より我國の物を持て人乃國乃物とて
天下は財物を通し國家の用を達するは眞の
商人といふなり末代は商人のいふは
目いふはとち賞なり賣の類なる天下は
毒蛇なり若輩なり富と得るといふは
あつちの云のていふて久しうに況や商人
わづらふ人を謀計の眼前の利潤なりといふ
むと神明の罰とわづらふらんおはけり

四

74

子

町人本卷二

卷四

へ主此よりとちびて我とゆがうものと
のち得た口惜くゆりと恨くうやあき
事あぐり捨てたことゆや

ある人の云驕るもの久しからずと申れり
か多き事也驕るもの久しからずと申れり
失ふものより得るもの久しからずと申れり
いふよそいふとみえり驕るもの久しからずと申れり
風流の遊びやあきとや傲い悪悪は基やうや
ううにれりいふ是より起る易い云負て且
乗寇乃到るは致と負りた者にとわり

負て乗る人足るに賊と風情なるが荷物を
負あつ興車に乗付り盗人の軍を富貴なる
者かすい殺して物取奪いより事わり是みる此
方より寇をまのま致さる也いやき町人結核なり
衣装とて遊ふより遊ふはより事わりいより
下賤の身とて上はたかり人のよりいといふ
盗乃よりいといふよりいよりいよりいより
行儀作法よれ人成り身乃か盗人乃位と知
れ人の鬼事なり是と負かれども容いとあ
又いふ藏を慢る盗り誨り也容公治りい

論なりなりとて庫内くらうちの財寶たいうほうを常つねに用もちひ
て守まもりと解ときく此方このあたより盗人たうじんはねとて誨しか
るのちり女め人にの勝かちて娼客しやうかくとてはくく治ちめ
隠かくれり男おとこに此方このあたより我われといさひゆせと誨し者
なり其その中うちに小所人せうしよじんなるものあり中うちに位ゐ成なりとて
おどと分ぶん清せいとて凡流ふりう過かるはうとてい
皆みな中うちのまて禍わざはひとす移うつく也禍福くわふく門かどなり唯ただ人ひとが
くく移うつくもゆくと語かたけり

或ある學者がくしやの云い易えき計けい諸しよ善ぜん積しよ善ぜん積しよの云い名なはとも
多おほく惡あくもつまされい身みをあらはとふとく

いそくありけり善ぜんふ得える人ひとなりや惡あくも大
惡あくなり身みをあらはと事ことありとあらはれり
あるふく小惡せうあくあり大惡たいあくなり知ちるいつてけり
らん況いはや大惡たいあくとや小惡せうあくといふ時の運うんによりて
一旦いつたんやで知ちる哭なみに到いたるあり何なんを積しよるは
ゆへんやゆへ運うんけりて急いそに災わざはひ到いたるやありと
いふは移うつるなりけりけりけりけり身みをゆへ
り家けと考かうふと云い小善せうぜんなりて益えきありて
只ただ小惡せうあくなりて傷やりてけりてとてけりて
惡あく移うつりて掩おほふ是こゝ聖人せいじんのいふなり又また曰いふ

積善の家必と餘慶なり積不善の家必と
餘殃なりといれ子の評識なり臣君公卿父子又
をあると幸一朝一夕のゆゑなり其由てきり
所のもの漸くなりといふをこそなり君公卿を
悪しその始へ僅なり一念の悪なりきりて其惡念
漸く廣大に到て終つては其の殃なりといふ也
一朝一夕の不けんなり殃といふは餘をある
も一朝一夕の善といふは小善といふも積ま
るにけき身のあり子孫のありきりていつの
積といふはあがらに千度百度のきりはあらず

二度三度とふも是積といふのなり況や千度百
度を霜を踏み踏み氷を踏むのなるもいふも小
惡則大惡なり也度と霜を踏み踏むて終つて
き氷と成るのなりといふは其の終つて有る事
なり又古語は岷江始へ觴と楚に入て則ち
氷といふも氷なり其の氷と水も積りて
楚といふ國といふ岷江といふ處のまき深き水と
なり古語の氷と氷といふは其の氷の雪下
の下に氷といふも同じなりといふなり
或人の云清水は魚もゆずといふもや家語と云

書の中へ水至る清と云へ即魚を人至て察
する時則佳かといひ世の諺も是よりやいふ
らうとんさ此語いふ公別義あり人のあつふ
才智とて物毎深察緊密なる所いあらひす
れ一國の授をいふなりにはなまじく行儀つ
よれ時萬人をばくこれ一至て清きいふ
到の字れいはいれとてり老子の小解と書けり
とてこのあひも是なりなり町人を公儀の
授のすに緊密なる所い清水は魚とあらずと口
をきつては夜のいさをもきとるものと移ふとい

おろしきこれ魚のやきつんや魚は魚よとせ
よとくれ鱸ひつとつ泥まねとあつたもの
うしつて多しゆらぬ

或人の云長者二代ありといふも一代とやうぶふ
いわけ一は辛苦を積て漸く富といふも子孫
ふもつたといはく花車風流は流の驕る公
もふく財寶と費し失ふて古今移りぬる也
中にも町人の常の禄をいふ久しく富まるとな
らぬとて驕るなりとて費し失ふ
よのまはやうとて道理なれば不孝の罪なり

或人のいづらは大黒と福の神といふて萬人の移り
此謂佛經より有るやされ我々の法といふとい
ふはこれ其是を信仰するふを得ありといふといふ
先大黒い色黒くまけいさく形ふあく一色黒ま
い美濃のいさくあけいしあけ短きいさくと謙
ふ形ちり足は米穀の信といふふ財寶の信とい
ふさく同じく小槌といふといふ人れ身とあきさ米穀
財宝を第一とす是は其用れとあきさういふとい
ふといふはあきさく人れ小槌の四民といふ面
いさくこれ家業職分の道具はあきさくといふといふ

を敬りまかすといふ教ありあきさく勤めといふ
富貴よりて千萬人をあきさく是福の神の
信ちり世俗は槌の板といふ造る處の大黒い靈
驗ありといふ槌の通といふは其通て廣く
氏を後し日夜踏みといふは其の板といふて造る
は是萬人の謙といふ諸人の膝下のあきさく終る身と
いふて用は達といふあきさく此といふといふといふ
いふ槌板といふはあきさくあきさく去神道者のいふは
世は信仰といふ大黒の像は日本大國神の像とい
ふ佛説といふ大黒の神といふといふといふあきさく

天竺より摩伽迦羅天神として其神體を
 有りし像より摩伽迦羅といふは唐土の文字を
 翻譯といふ大黒に二字を去る人等を用ゆる所
 の形像は日本神道の大國神として天竺の大黒
 天神といふはともかくも其の也といふは形像の
 神日本の人れ傳來せられて天竺に安んじたりと則
 惠美酒神といふも亦はもとより槌といふは土乃
 和語して五穀萬寶の土より出づ此故に大國堅固
 のはらとありて萬物をうるものと見ふはなる福れ
 神なりと槌といふも一皮は亦おもしろと事か
 くれ少くは他におもしろとみるをて小の字を附
 へたるものなりといふなり

或人の曰日本正月の儀式は神代の風俗とてけしと
 清淨質朴とてわづらひ禮法なりねけけ直なる
 娑常盤なる色より人れ公の直なり常あるを
 ち免し蓬萊の四より雜糞のたれく本奥たる
 侍は繁ふはよりといふも人をてふたうやといふ若と
 をよりといふもと見則天地乃仁心春ふあつたり
 れ故ちり飾のすうけりうらう簡略なれん七
 日乃難水十五日れ粥いづもは清淨なりて質素之

其日小末のつて未飯とれ或ハ師の骨と養
乃とくいふを費といひて是るを神代の遺風
姓古の美膳なる事と示して未代なる者とせりぞ
けり終りのなりとつり

或人れ云武篇ハ武家ノ業トモ所人の西作ナリ
勇ハ所人ト云ふも人ハ有るハ武篇トモ勇
トハ主ノ人ナリ所人ハ第一貨村ノ居トモ
不自由ハ堪忍ノ外ノ名圖ニモつとものく
職分トけりて家業ハ退屈デるハ所人ハ勇也
武篇ハ勝負ノ利ナリハ所人ハ勇ト好むるハ

武士ハ主人ノ身ト賣盡スルハ軍陣をけりて治
す終る世あり且其武家トれと假初の末とわく
武をけりて主人ハ名武死しとるハ
此故ハ若多しとて死と安くとるハ所人
ハ主人ナリとて父母ナリ武篇ノ佛トハ不孝
ハ第一也都て人間ハ生得ハ剛膽ナリ義ある
人ハ剛ハ義ナリ人ハ膽ナリ常ハものゆきとる
如きハわいゆるとあけと安くとるハ
是ハ義理ハ勇者ナリハ危角所人トモ終
るハ孝ナリ武道ノゆけとやと他の二錢

と早怯^{はやけ}なりゆかれそ町人の武勇^{ぶゆう}され能くする
 勇^{ゆう}夫^ふ射^{しゃ}御^ご不^ふ違^{ちが}く我^{われ}尚^{なほ}くい不^ふ欲^{よく}く聖^{せい}經^{きやう}うと
 是^{これ}よりま命^{いのち}いせしむるもの惜^{おし}まは天^{てん}理^り自^じ
 然^{しか}りあるが如^{ごと}いのら露^ろらりしめせぬいゆは
 いづまに義^ぎいさみ血^ち氣^きいせられしる廣^{ひろ}言^{げん}なり
 一^{いつ}休^{きゅう}和^わ尚^{なほ}の靜^{せい}世^{せい}のぞく今^{いま}そふれとぶとれ
 されしめいいて何^{なに}の恥^ち辱^{じよく}をしめさるるに
 足^{たり}ぬくはよとそ高^{かう}上^{じやう}なり靜^{せい}世^{せい}なりする
 事^{こと}聞^き人^{ひと}ははたしむは莊^{しやう}子^しのいつるに生^{はう}に天^{てん}代^{だい}
 吾^{われ}孤^こ獨^{どく}死^しい天^{てん}の吾^{われ}と安^{やす}んといふはり好^{この}く

死と畏る人れあよいつあいのちりと詠れ
 或人乃咄ふ富る百姓のひより子樂舞教寄くと笛
 をあは羽より人とねり器用なる笛をねとあはる又
 一味ねのほどいていつる我子の笛は器用なりと各
 言れども我耳よいつあはる音もふあはるなり
 いは聞ては聞うるはあはるくくあはるいつあはる
 こいゆづれ田舎もあはるあはるれ身とあはるや
 中らいつるや又我富る所人れ子三味線を引
 びよるの又いつあはる三味線の音は我耳よ
 わはあはるいつあはるあはるあはるあはるあはる

そいつははたし来ハ日傭^{いづ}られ風情^{ふうじやう}とせぬに
べさうやと眉^{まゆ}とあらて歎^{なげ}さうるも
人^{ひと}と寄人^{よじん}多^{おほ}く物語^{ものがたり}も中^{なかつ}に人^{ひと}のうへ金^{かね}くよ
いかりもの也大方^{たうほう}富^ふ貴^きなる人^{ひと}は子^このやうに
福^{ふく}多^{おほ}く福^{ふく}われへ壽^{じゆ}多^{おほ}く福^{ふく}壽^{じゆ}もふ金^{かね}た人^{ひと}ハ萬
人^{ひと}の中^{なかつ}にも有^あるにそのやうなる人^{ひと}は田^い舎^や人^{にん}の
ふたつやふたつ側^{わき}よりけり出^でてつるに相^あひあは
しきふたつはのやうなるれ我^{われ}は里^{さと}とていたれ
人^{ひと}をわづらひたやうにゆふにみなる者^{もの}は不足^{ふそく}と
果^は報^{はう}人^{にん}もゆふとみ子^こにやうなる者とて人^{ひと}ハ我^{われ}

とめ七人^{しちにん}といふ何^{なん}程^{ほど}の金^{かね}限^{かぎ}とて人^{ひと}ハ目^めを
錢^{せん}三^{さん}貫^{くわん}作^{しやう}といふ案^{あん}といふやうに二十餘^{ふたじゆ}と
目^めを盡^{じん}と堅固^{けんこ}とて金^{かね}よりよく田^た植^{ちく}とて金^{かね}つ
て多^{おほ}く金^{かね}を積^{たか}めとて繩^{なは}をいじつとて多^{おほ}く
金^{かね}を積^{たか}めとて金^{かね}を積^{たか}めとて金^{かね}を積^{たか}めとて金^{かね}を積^{たか}め
人^{ひと}と感^{かん}とてはたふ富^ふ貴^きなる人^{ひと}は金^{かね}を積^{たか}めとて金^{かね}を積^{たか}め
足^た事^じは金^{かね}を積^{たか}めとて金^{かね}を積^{たか}めとて金^{かね}を積^{たか}めとて金^{かね}を積^{たか}め
人^{ひと}ハ金^{かね}を積^{たか}めとて金^{かね}を積^{たか}めとて金^{かね}を積^{たか}めとて金^{かね}を積^{たか}め

さて町人の家職とやらもいふは母の家とて
一向は官俸禄のやうなもので學問の具主
意改く道理もなかり學問の本意はいかに
一人は風俗萬人よりけりといふはたれ
世上の學問は風俗を改むて學問を身
の害とみる者多しは故に秘を志す
やう肝要ありやとて町人の學問は別
ふちつとらなりといふは

町人囊卷一終

町人囊卷二

或町人の老翁はいつか禮儀は町人として
いふなりや昔乃町人の實儀のふり
外のよりすれし今の町人の身は
過ぎふたり實儀よく禮儀武家の風を
多く山魏といふなり町人の質素を
して外をいふは易簡を奉じて樂
とふなりやふとて富か町人の身と高
なり人なりて公家武家乃禮法を
奢るなりとの多しとて礼と義

多^くあ^らむ^もぬ^もひ^も似^もふ^も似^もと^もや^も終^もは
一國の風俗^{ふうぞく}とあり行^ゆく^も過^く美^みあり多^く
一禮儀^{れいぎ}の果^{くそ}に驕^{かう}あり驕^{かう}の果^{くそ}に非^ひ儀^ぎ
とあり老子の禮^{れい}に忠信^{ちゆうしん}の^もすれ^もで^も礼^{れい}の
端^はなりとの^もあ^らむ^も此^こを^もい^もち^もる^もや
根^ねを^も禮^{れい}に^も文^{ぶん}理^りの^も節^{せつ}文^{ぶん}を^もい^もち^もる^も分^{ぶん}
際^{さい}に^も過^くる^も禮^{れい}法^{ほう}に^も非^ひ禮^{れい}あり^も驕^{かう}奢^{しゃ}
と^もあ^らむ^もあり^も禮^{れい}儀^ぎなり^もと^も人^{ひと}の^も人^{ひと}も^も
び^びし^しる^もあり^も礼^{れい}儀^ぎは^もか^かつ^もも^もを^も傲^{おう}と
あり^も者^{もの}多^く一^も庶^{しよ}人^{ひと}の^も礼^{れい}と^も教^{きやう}と^もあ^らむ^も

人^{ひと}の^もい^もち^もる^もを^も教^{きやう}と^もい^もち^もる^もを^もあ^らむ^も
なり^もと^もなり^も

或^{ある}人の^もい^もち^もる^も無^む欲^{よく}は^も二^もあり^も天^{てん}理^り無^む欲^{よく}と^も畜^{ちく}生^{しやう}
無^む欲^{よく}と^もなり^も天^{てん}理^り無^む欲^{よく}に^も福^{ふく}壽^{じう}の^もを^もふ^も一^も多^く天^{てん}
下^かに^も要^{よう}あり^も畜^{ちく}生^{しやう}無^む欲^{よく}に^も身^みを^もあ^らむ^もは^も家^けと
あり^もと^もあり^も所^{しよ}人^{ひと}の^も知^ちる^もを^もあ^らむ^もと^もなり^も

或^{ある}者^{もの}の^もい^もち^もる^も侯^{こう}約^{やく}と^も吝^{しん}惜^{しやく}と^もい^もち^もる^もを^もあ^らむ^も
なり^もと^もあり^も侯^{こう}約^{やく}に^も天^{てん}理^りより^もも^も青^{せい}紙^し
た^た櫛^し門^{もん}に^も十^{じゆ}銭^{せん}と^も失^うは^もれ^もく^も五^ご十^{じゆ}銭^{せん}の^も炬^く火^かを^も
買^かひ^もく^も尋^{じゆん}常^{じやう}の^もを^もい^もち^もる^も是^{こゝ}に^も天^{てん}下^かの^も貴^きと^もい^もち^も

私乃利を忘れしる候乃道なり異國よと此
例なり程伊川雍華の間より後一貫
の銭をりて馬に鞍にけりし金よつまで
るふ銭あり僕主のつく今朝装ひをり
ありて失ひし人の水と流る時落しめり
とい時伊川あげさういて千銭可憐と
つるへり。坐中の二人若くいつるハ一貫の
銭を失ひし人そく惜と幸れといふ人
人のつるは千銭ハ微き物なり何ぞをとり
いふんやといふ二人のいふ水中と裏中と

異なり幸れし人失ひし人是を得るふ何そ
嘆くやといふ伊川のいふ人これと得る幸
あり失ふといふは銭ハ天下國土は用ある物
なり若水中に沈みし水く世は用ある事な
る人し吾はち終とあけくとのいふも青
砥た塩門のうろとかうけるさういつれも其
銭を天下れるみ惜とるものハ一粒乃米一
粒の銭も吾國は費し失ふハ則天下れ用物
を費し失ふ道理なれハ天地造化の功と
こちよの処なり此さうと守りつーじん

五

或人の言は豊臣關白乃涉時驕者久一の如きと

五

ひりあてりけり哉

或人のいふ古語に富むものい多くは慳なり
慳なるは不富富る者の多くは愚也愚
小あつたは不富とて慳は慳貪なり公
はくむるをては財寶多く貯る
わてはとほてや非義の謀計とては富
をいふや富る人の貪む人より却て衆
わては五穀貨財を賣りて賞
とていふは富る人の志とて天下万民
の困乏を憂ふの志一人富むるを

貪者よ此衆あり貪は世上の福の神とて
あり困乏の一家とては漢の船を水
汲するの如くいふを貪者の所なりて天
下は重寶是より大なる福の神あり此は
人民の二字をわかんぬと訓と書經に
民をいふはく下とて民の推邦の卒
かり本固るは困乏とては富るや困乏無
位の身ありて僅の財寶を鼻より貪者を
つやに慳とていふなり

或人のいふ富は常徳あり我知るは人の

舟の運風人れ舟乃順風ハ我々の運風より様敷
隣よりよき風いれたるに富より往くやうと
いふ所のをよとせいあうきものなり富か人乃
財寶減より付い貧家。財と益貧家の富ん
事と移りて日用のつらみぬかうては富る家
いふと財寶と持てんとて家業を勤めて懈
らと相するいふらとわれより命をせ間い立
いふもの之金銀貨ハ根本天下萬民の用物
なり一人して貯ふふら多き四の万民の用
をふとて病し此故に一人過分の金銀を

あつてふ事ハ利をうていつてもふ人一旦
千万の財寶と貯てふたふく庫中かのこ
積るふれ其金銀死寶と成る金銀は徳用
なく自他の重寶と成事なり此故に藏の中
ふれ後より積るふれとて思ふに勤く儲て
富み久しきものふ事と謀る其謀るより
つて小利大損とあるふれよおのつてやむ
くあつていふていふく富んてはけふの
自然のいさふいかり財寶増事極まる所ハ
これと減む我財寶減むい人乃財宝と

増我財宝増く地の人乃財寶減く乃理の
きく人の天地陰陽の二氣の常住普く流行
して一而く久く留滞する事なく若陰陽
一所く久く留滞する事ある所の是氣の偏
わづらふより地に天地乃変災となるもの也
天下の金銀も又あるとてこれ万民は普く流
行して一而く久く留滞する事なく留る所の又
一といはるるなく教にゆく是自然の理なりと
いふ終るじなるれ
或人のいふ禮記は志い満つるに樂に極へるに

とあり又易の豐れ卦は日中をいへ是き月盈
きは別食天地の盈虚と時消息といふんや
人は世をさるや況や鬼神はおのそとやといふ
是等の教へてそれる常住なるものいと多に
いふ世のつらうか松樹千年も終る朽の種
花一日もおのほろく常成をいふと語ふる側
より金もさるるれ終るわづらふる物といふ松樹
千年も終る朽わづらふる物といふ松樹をい
ふ世といふは月滿といふ虧ふとて不断と
日月もそれ終るわづらふる物といふとて

一ツハ一ツハ一ツハ一ツハ

或人の云ふつづの願ひ望み先おのまが身とお
さあつをふくむは其まの成就と
ふん待へ一町人の富を求む其基を
して果報と待ひみなりたり楚辞は曰善は
外より来たる名は虚くあまうに就く施し
まゝて報いあらん孰り不實して獲るもの
世話より網をふして測るのまう忘れむは
ふと種をまけむいかにぬるやその訓めとし
つるれよその意聖人けかへみ同くもの

かりしつり

或人の云ふた葉玉物とて人毎は自慢せざるもの
あつた人儒書やと満い損と招き謙い美玉
受ふれ天の道也とあり佛位とて七慢の脱り
危難自慢いとあつたなりとて学問才智
藝能より自慢とるいよのつひれる也さうつ賢さ
人い其慢をさうと押へうて外にあつた
べして人よ謙とさうとわくも世にけり慢をか
きかぬといつてはるに慢をあらぬあつた又
ふ法く氣質はほる者いんをさうとぬる

藏し金ありてはつて情を詞にあらはれ容よあ
 て人は忌憎まるのやうにいつくも得ておのれ
 とまかりうらやまし護りて内を憂へく情あり人
 あり何れも一憂あり人いふれも情あり又至
 るを能くても情あり者あり氏系圖に自情
 一分別を自情一達老孤自情一財寶一
 自情と親族自情男自情ありこれの事と
 ちく一文も通ちる者いふ何の自情とあるや
 めんとやといふ是れ自情ありて求ふ人負ふ
 誦一公くといふて自情とこれいふ公自情とや

いそぎ形ははか^つ譲^りて内公人^{うちこうじん}は傲^{おご}気^き豪^{ごう}ある者
りわり恩^{いん}と卑^ひ下^げ傍^{ぼう}と^いなり此^こを^いあぐ町^{まち}人^{ひと}の
より^いつと多^{おほ}く又^{また}故^こ郷^{きやう}自^{みづか}傍^{ぼう}なり天^{てん}竺^{しやく}の佛^{ぶつ}國^{こく}
して准^{ひか}我^が獨^{どく}尊^{そん}の大^{だい}王^{わう}此^この國^{こく}の國^{こく}の粟^{もく}穀^{こく}國^{こく}也^{なり}
と自^{みづか}傍^{ぼう}と唐^{たう}王^{わう}の聖^{せい}人^{じん}の由^{よし}そ天^{てん}地^ちの中^{なかつ}也^{なり}
萬^{まん}國^{こく}分^{ぶん}一^{いつ}仁^に義^ぎの國^{こく}日^{にち}月^{げつ}星^{せい}辰^{ちん}も此^こ國^{こく}を^い分^{ぶん}
一^{いつ}と照^{てう}し終^{しゆう}す^てて自^{みづか}傍^{ぼう}と又^{また}日^{にち}本^{ほん}の神^{かみ}也^{なり}
世^よ界^{かい}の東^{とう}もあ^あつて日^{にち}輪^{りん}始^しく照^{てう}し終^{しゆう}す^てて國^{こく}も
て地^ち靈^{れい}の^い人^{じん}神^{かみ}也^{なり}美^み玉^{ぎよく}才^{さい}一^{いつ}の玉^{ぎよく}そ金^{きん}銀^{ぎん}も
多^{おほ}く豊^{とよ}秋^{あき}津^つ國^{こく}も中^{ちゆう}津^つ國^{こく}も浦^う安^{あん}國^{こく}も

つて自ら自憐と此三國おのく自憐なり自憐
して其國の作は政道より又大なる自憐を
天地の向はすゝいまる物多し其國よ人と責
しと此故より人の天地の靈と異なりと誰
の思とゆゑとみ付るや人間されとこれを
名付る此自憐のて一日も人へ有べ
くは多し貪賤を食の身なりとて
麟鳳の事なりはとわたり人れんる義を自
憐して靈物なりと云ふとていふとて但
くは多し又自憐なりと云ふとて笑て止ぬ

或人の曰氏のけふふ茹ふいふとていふハ貌
の上の多しなりとて云ふれきとていふとて人間
のうらひ十人は七八人いけくも又母は
ものなり但し世にありはとていふとて
わり又いれおちる遠く他人は能く
多し多しなりとていふとていふとて
いふとていふとて容へる人はいふとて
諺とていふとていふとていふとて
ものなりとていふとていふとていふとて
たれよりとていふとていふとていふとて

おしゆゑのされいさゝ始より定りてゐるが
わい又母賢やて子の不肖又母不肖やて
と子の賢かり見ても又一偏いあ糸ととん
のうじ似我蜂の別の虫紙よりておのまじ
形り変化をい悪人れ子なりを善人れ子と
して教ふい悪逆とてくじ程の罪人といはる
ゆゑやされも罵のゝあ子れ中の特島乃
あやもわい善人よりいても悪い悪人
まゝあやもわいや武家みか神様とい
悪いけいよりすゑ又剛て子に臆より町

人みな神氏をい仰りつゝよりすゑ又後
幼きて子の驕う又剛あやもて伐あやも
又後よりてそのいゝいゝ
あや人の物格は後醍醐天皇の賢長藤房卿の
のあやい末代の人の借物をまゐること様
器はるすいなるぬとのあやいゝや藤房卿
の時代は乱世とて無道なる人より多しとて
それの借物とてつれて怒れりやういのも多
うじよや其せとてさういゝや今や世を
人をやう他人の財寶とては邪正の二つ有

後世の事とけし身の分際と計りて其けり
より其後と分判して人の財寶と假いなり
入をきりて世とて其ちるに分際とて其後
世に人なりと入の過美の驕よりて其用事
不足なりて他乃財寶と假者いふれと非なり
とす又と人より此より人なりとて當座の
利難よりて非とてとるべしと人な假い非也
依非とてとる人自他の利を計りてあるに
始より利分のらとみけしと其人を恒と懸意
のほり然りて假と者いふにちなりけり

人の道理をりて借用し道理なりて
假としやまの少し假人なりといふ事
うといふと假とし人も慣貪し責
る事なりとて末代は邪偽とあり
多し人の財寶は假事多くあり
驕のりけりい宿ははち人のもの
なりとせりある事なりといふ事なり
假人なりと又邪欲なりと入の情事乃
是なり一億のきりいせりあり
なりといふと世なりといふ人借用と

和くも末代へ借用と解をもん得る
ふくもやふきものへ借銀なり果
竟相對の邪歟より事無かり事
やふくおとせ上乃令銀い天下
万氏乃令銀なり一人やふくく先
をれて人のくけく銀みさんへ重買
乃あつくりいあふとふ乃ゆくりあ
りあふ人乃材賣銀きうなる人よ
ひて天下の用を達きじいま
乃代くうまねてい重買いふた

上東と得ていひる事わいり若ひる
るあふ骨をさるてい遠きるわん世故よ
一生人の財寶といふなり日夜をいひ
まふも縁へい是と君みれり別とすは縁に
ある人のいふはましく草いつりる事也
其中に陸奥守平宣時わん長最明寺入道殿
より呼る事ありいやうき事なり人へ返る
たぐく直金のみていやさんと延引で終よ
最明寺殿推事わうて重金あふさうつるや
夜中るいひ襲るなりあても疾ふれりいひ終て

使わりの暑き日におき直きとてあつたふ
最明寺般若子に土器とておまふ此酒を
いり給ふにさびくたばつたきりあつた
あけも何と勝はよ有るやきん人の寝
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
は紙燭とてあつたあつたあつたあつた
かくて是所の棚に小土器は味噌の少分
をいれて思ひとてあつたあつたあつた
本是れを教献とめてあつたあつたあつた
わりあつたあつたあつたあつたあつた

質素易簡の粹たるを付て觀念する小討論
 而て感嘆せりしかば、今にやれ、斯く今の代
 るは、如何の事と聞ても、何と云ふに、物
 語の、さびてあるを、はるる人、か、後、
 天下と云ふ、人、乃、是、所、何の、はるる、
 人、か、その、強く、美食と、り、あ、ど、小、土、器、
 け、る、味、増、て、事、是、れ、とて、下、人、の、勞、と、い、
 ち、あ、そ、は、る、か、何、を、ぐ、れ、と、或、ち、後、人、を、
 は、る、小、優、ち、る、有、格、ち、り、又、天下、と、知、る、
 人、乃、門、業、と、る、の、宣、時、晴、着、の、直、金、下、持、

かたむく不審からうまねもじうへ道代乃如
くれ衣服もあゝありゆ人官位ある人といふも
直玄襲晴云うう人いふおれくはく垢付
わし洗いて用いふも也室時其新うに
晴着の直玄洗濯ありぬやといふもあ
うも時務ふもあれと語つれー

又同人のうらゝ今の世にそるゝ料理物
うまねいふいふやとせゝるゝ多く
今れやとせゝる物いふやとせゝる人いふに
りされ物多きとや今のやとせゝる号とせゝる

よあ禁中ひてゝ萩の花といふて女中おし
まこしうとせゝるやとせゝるやとせゝる萩
乃れの本也最明寺入道殿足利た馬頭義氏の
祚へ鶴岡社系の子にまよとせゝるやとせゝる一
萩うらあゝ二萩海む三萩いひいひい
いそやゝいひい草にあり今の世に少懇懇
や客人をよゝゝいひいひい中く萩うとせ
やゝいひいやゝいひい此おはゝい多ゝ入道
代い雉子よりい鷹と貴やとせゝるいひい鷹と
賤とせゝるや雉子ね草やゝいひい湯殿の上

うひつゝはしくひくは後深草院の中宮れ
神方の湯湯殿乃上れ棚は鷹のやうな中宮
乃湯又老盤井相國湯後してやうの物され
く其婆はわに松やき事なりといはれり
結いゝとや日本とて雉子へ上代より貴人の
調食ありとて鷹へ上代の人へ食せざりとの
して中宮よりてやうなや此故實はより
て雉子よりてやうとて料理の間乃棚ありとい
とて例る是又質素とて故實とて過美の
物をそそいやとて風俗なり湯殿とい料

理の間なりとて浴室の傍はわにやうな
事ありと今の町人れりといはれり入る事
ありてやうはよりてさき人よりて也
わろ人のいつかい今今世は黒玉のやうの
身はやういとい商人のやうな人なりとて
とてわりよれまゐとい今の町人なりとて
貴人の時代よりいふとて町人をいふとい
まゐのやうな人なりといふはむじの類
を好まぬといはれりやうな種をさへ商人なり
ハ相成りてなりやうなや町人を唐人の類

をやらせしむ今の世は町人多くてよれぬ事
事なれど身ふやうなはゆふ人も其振
禄多うた武士公家のものもさういふもの
ところなくそいふうあられもおのつゝ相
せう事うそいふ武家の供人多く馬と鎧
より多う多きとはあれど町人の唯一僕も
羽二重縮紗もつくろふたれどもあて身にお
くぬさゆたり武家くもふといはく供は
又町人くもやうへ羽二重の羽織と着たり
名のきくといひきき終るものといふ事

へいといゆていふやうな事について多う
都よりたれ町人何うとや一生脇指とさ
事より武人日本の風俗にて刀脇指を礼儀
とす武勇の爲のものといふといふは昔より
ふかへ禮義といふ羽織といふ袴と着たり
さういふ礼儀を武士は武道を常に
役たり此たういふと更にて丸腰ちうの武
士の武と忘るにたうぬる禮なりといふ
町人へ是は異なり何そ一代より一代も
まはるたれ道具と常に帯て一寸の

同竊^{もくろみ}座^ざとらんや唐人^{てんじん}の千里万里^{せんりばんり}の旅^{たび}約^{やく}
 し丸腰^{まるこし}なりとて之も終^{はつ}る鬼^きは冷^{ひや}まじき事^{こと}
 を世^よを治^{おさ}るる律代^{りつだい}の如^{ごと}くけるに一德^{いつとく}の
 扇子^{せんし}一本^{いっぽん}をていつくすむを易^{やす}よのをやとて程^{ほど}
 く丸腰^{まるこし}なりとて是程^{これほど}は道理^{だうり}の将^{しやう}へ明^あるこ
 き物^{もの}をいへてあて町人^{ちやうじん}へ短^{たん}き脇指^{わきさし}をふ大
 脇指^{わきさし}をいやりたるものなり武士^{ぶし}の仙^{せん}をおさん
 よりいへる其後^{そのあと}乃町人^{ちやうじん}とてを安^{やす}くは延^{えん}去^さ
 時代^{じだい}乃ち別^{べつ}とてふ人も又多^{またおほく}
 あら富^ふ限^{げん}なり町人^{ちやうじん}の子孫^{こそん}唐^{てう}乃天神^{てんじん}を信^{しん}仰^{やう}

して家内へ安置し毎日の拜禮おまの備へ
 物ねえ事なり是又思ひてとて
 いふややめのもめ人れとてとて
 ぐあふより此とて天神と能く
 一とてはふ親先祖の功業より
 子孫安樂なりいとわたりて
 いふふ佛神の清恩なり
 のまひいとて長者のまひいと
 といは親先祖其身小艱苦
 くろ財寶をゆつりわたりて
 其恩大方

（町人書二）
（二）
倭よりわが唐土より親先祖の靈魂を則ち大地
乃神明一體として祭奉りてまつるなりと
つて人あり

或人のいふに豊年とて八木下直されい武家困
窮なり故に世間商賣なくて町人のあきけに
ゆゑといふもいふあり道理なりといふも
あきけに八木下直されい民餓死せし事い
わくもいふなりといふもいふも八木の直なりと
くて商賣よくたけり餓死なりといふも
いふも是衣食の事なりといふも町人乃十

分は飽満なりと紙褌ひいて常に貧窮する民
れり紙褌なりといふもいふも町人の
世は紙褌といふもいふもいふも金銀れ
殖する事と紙褌多く商賣して金銀とゆふ
貯ふんとて紙褌なり是富なり紙褌なり
乃大欲不仁なりいふも町人なる者此念とて
いふもいふもいふもいふもいふも用不足と
いふもいふもいふもいふもいふも大欲の移りい何れ生
とる事なりといふも

町人書二終

